

「恩師」との出会い

本間 万里子

私は、人前に立つことも思いを言葉にすることも
本当に不得意で、教員という職業に向いていません。

にもかかわらず、勤めてから早三年。反省したり
落ち込んだりダルマのように転がり、沈没船のよう
に沈みつつも、何とか息ができています。

それは、心から「恩師」と思う二つの存在のおか
げだと、感謝しています。

ひとつの「恩師」は、日々成長する眩しい生命で
す。

年少組では、大好きなお母さんと離れて過ごすこ
とが大事件でした。

とにかく泣いて泣いてお母さんだけを求める子ど
もと、なんとか安心して過ごせるように好きな遊び

や友達を探る大人と、日々戦いです。

そんなある雨の日、Yちゃんが「先生、ちょっと来て」と私の手を引つ張り、テラスまで行きました。「どうしたの?」ときくと、「あのね、葉っぱが泣いてるの」「あ、本当だ!」。

しばらく二人で葉っぱが泣いている様子に見とれていました。そこへいつの間にかKちゃんも加わって「たくさん、たくさん、泣いてるね……」。

思わず私が「葉っぱがたくさん。涙がたくさん。悲しいってことなのかなあ?」。すると、Yちゃんが「楽しいんだよ。だって、いっぱい泣いてるから!」。Kちゃんも「一人じゃないもんね」と、につこり。

その二人は、とても仲良しの相棒になりました。

年中組になると、ウサギにごはんを持ってくる仕事が増えます。

初めてウサギに出会ったときには「何だか怖い」「目玉が大きくて飛び出そう」と逃げ腰だったTちゃん。しかし、近づきたい気持ちはいっぱいのおかげで、毎朝ゲージの外から、のぞきこんでいました。

三日目の朝、Rちゃんが小松菜をあげているのを見て、「一緒にあげてみたい……」とつぶやきました。その声をそっとRちゃんに伝えると、「Tちゃん! おいで!」と誘ってくれました。

こわごとと小松菜を差し出すTちゃん。「わー! もくもく食べてる!」「でしょ? 小松菜好きなんだよ」「ひげ、いっぱいあるんだ!」「そうだよ」「あ! 黒いのが一本だけある!」「え? どれどれ? 本当だ! 知らなかった!」「なでもいいかな?」「そーっとね」「……あったかいね」「どきどきしてしてる」二人は、そんな会話をかわしていました。

その後、自分は苦手だった小松菜を、大好きに

なつたそうです。

年長組になると、年中児を部屋に招待して、一緒に遊ぶことになりました。

手作りのトロッコに、年中児を乗せて年長児が引つ張り、部屋を一周します。

引つ張る前にはこんな会話がありました。

自分よりも体の大きな年中児を連れていたMちゃん。

「(引つ張るスピード) 速いのと遅いの、どっちがいい?」

「……速いの」

「えー、速いのは引つ張るの大変だし、危ないよ。

遅いのでいい?」

「……(うなずく)」

二周目にも再び「速いの」と言われると、

「じゃあ、ちょっと速くしてあげる!」

「俺についてこい!」と強気のHちゃん。

「(引つ張るスピード) 速いのがいいよな」

「うん! 速いの!」

それを聞き、張り切つてスピードを出しすぎ、壁にぶつかつてしまいました。大あわてで年中児の前に駆け寄りしゃがみ込んで、

「ごめんね、ごめんね……大丈夫?」

それからは、年中児を肩越しに振り返りながら、スピードを調節していました。

「ここを持ちたい!」と言って、引つ張るロープを

掴んで離さない年中児に、困つてしまったEちゃん。

「ここ、持ちたいの? でも、ここ持たないと私が引つ張れないの」

「私が引つ張る」

「でも、乗ってる人は引つ張れないよ」

「……」

「乗ってる人がここ持ってたら、ケガしちゃうよ」

「……」

「乗ってる人は、手、ここに置いてね」

「うん」

後日、年中児が絵手紙を持ってきました。

「楽しかったです」「また遊んでね」という声に、

「どういたしまして」「いいよ」「いつでも遊んであげるよ」と誇らしげ。

しかし、年長児だけになると、Rちゃんが口火をきりました。

「もう絶対やだ！ 疲れちゃうし、俺、全然遊べなかったし、もう絶対やりたくない！」

私は、それももつともな気持ちだと感じました。

「その気持ち、すごくよくわかるよ。だってRちゃ

ん、いっぱい走ってたもんね」

「そうだよ。だって年中の子、いきなり走っていったら大変だったよ」

「そう！ トロッコ乗り場でも、危ない道を走っていったら大変だったから追いかけて、『ここは危ないんだよ』って教えてる所、みたよ」

すると「……そうだったっけ？」と照れた様子の

Rちゃん。

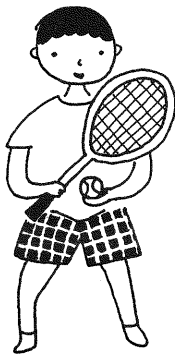
「そのおかげでケガしなかったし楽しかったと思うよ……でも、他にも大変だったし疲れちゃった人、いるんじゃないかな」

「俺も！ 全然話さかないし、しゃべらないし、勝手にあっちの方いっちゃうし、大変だったよ」

「二人いたんだけど、一人

は動きが早い

人で一人は遅



い人だったから、忙しかった〜」

「本当に、そうだったね」

すると、いつもは口数の少ないYちゃんが口を開きました。

「でも楽しかったよ！ だってトロッコおるとき『楽しかった〜』って言って、にっこりしたもん」

「トロッコ二人乗りで引つ張ったら、びっくりした。俺って力持ちなのかな〜」

「『トロッコ大好き！』って言ってた！ また乗せてあげてもいいな」

自分は遊べないし、相手には気をつかうし、気をつかっても反応は十人十色。年長組は本当に大変だったし、疲れたと思います。

年中児がいる前で、その本音が出なかったことに、成長を感じました。そして、年長児だけになり、

安心して本音が出せたことを、嬉しく思いました。

その本音をきいて、さらに、子どもたちから「でも楽しかった」という声が出たことは、頼もしいと思えました。

もうひとつの「恩師」は、『学びびたり、教えびたる世界』を教えてくれる先輩の保育者です。

『生き生きとした集団は、星座のようだ。』

夜空には大きい星・小さい星・明るい星・暗い星・暖かい星・冷たい星・遠い星・近い星・赤い星・青い星……様々な星がある。

それぞれ輝いている星を、より大きな視点で見ると、ひとつの形を成している。』

子どもと接するとき、よくこの話を思い出しました。

普段とは違う時間の流れで、全ての感覚をときぎますこと。一人ずつ「この子はどんな星なのかな」

と近づくとときが一番楽しくて、ときどきわくわくします。

とにかくミミズが大好きだったり、木の枝が大好きだったり、石が大好きだったり。

新たな一面をみせてくれると、対応している自分の中からも、今まで知らなかった面が引つ張りだされる気がします。また、他の保育者や保護者から「こんなことがあったよ」ときかせてもらうと、さらにその子が好きになります。

一つひとつの星が、さらさらした好奇心によってひとつの出来事に集中し、「どうしたらいいんだろう」と自分の頭で考え、「やりたい！」というプラスのエネルギーがあふれてくる。何よりも大好きな空間です。

そういう理想を、言葉や理屈ではなく、共に生活をする中で自らが実践し伝えてくれる先輩の保育者を尊敬しています。

いちばん大切なものは、もうだめだと思ったときにこそ、いっそう輝きだすというのは本当で、「恩師」あつての自分です。

『楽しくなくちゃ保育じゃないのよ。まずは自分が楽しいと思わなくちゃ』

『短所をなくそうとすると、長所もなくなるのよ。いいところをのばしていかなきゃ。これは子どもも、大人も、同じ』

何にでも涙ぐんでいた子が、顔から熱いよく転んでもすぐに立ち上がり、大好きな友達を追いかけ走っていく姿。

向いていないとしても、『恩師』と時間を共有できることは、何よりも幸せで宝物です。

力不足を努力で補えるよう、走れるところまで走って、追いかけていきます。

(白金幼稚園)